

受 験 番 号

令和八年度 中学校入学試験問題

国 語 (三次)

(時間 四十五分)

〔注意事項〕

- 一、試験開始の合図まで中を開いて見てはいけません。
- 二、受験番号(算用数字)を問題用紙・解答用紙のきめられた欄らんにかならず記入しなさい。
- 三、問題がぬけている、印刷がはっきりしないなどの場合は申し出なさい。
- 四、解答はかならず解答用紙のきめられた箇所かしょに記入しなさい。
- 五、何か用事のできた時には「はい」と言って手をあげなさい。ただし問題の内容についての質問をしてはいけません。

●句読点、記号は一字と数えること。

一

①～⑩の——のカタカナは漢字に、漢字はひらがなに直しなさい。

(送りがなのある場合はそれも書くこと)

- ① 人にキガイを加えてはいけない。
- ② 姉はセキニン感のある人物だ。
- ③ 小学校のオンシに会う。
- ④ メンミツな計画を立てる。
- ⑤ 生活習慣をカイゼンする。
- ⑥ 日本新記録をジュリツする。
- ⑦ 山頂のきれいな空気をスウ。
- ⑧ 毛糸でマフラーを編む。
- ⑨ 国の再興をはかる。
- ⑩ 専門家が古文書を読み解く。

二 次の問いに答えなさい。

問一 ①～③の——の語句について、他とは働きが異なるものをそれぞれ

れア～ウから選び、記号で答えなさい。

- ①
ア 五分ばかり待つてください。
イ このスープは具が野菜ばかりだね。
ウ 妹は本ばかり読んでいる。
- ②
ア その程度のこととは私にさえわかる。
イ 水さえあれば大丈夫だ。
ウ 医者でさえ判断が難しい病気だ。
- ③
ア 急に雨に降られる。
イ 昔の生活がしのばれる。
ウ 多くの人から愛される。

問二 ①～③の文の [] に最も合う言葉をそれぞれア～ウから選び、記号で答えなさい。

① この絵本は子ども向けに出版されたが、 [] 大人の読者の心をつかんでいるようだ。

ア いかにも イ さらに ウ むしろ

② 何事も、上達するには練習を重ねることが一番だ。 [] やみくもに練習するのではなく、適切な指導のもとに行うことが重要である。

ア ただし イ しかし ウ したがって

③ 激しすぎる運動は体の負担になり、勉強のしすぎは視力低下や運動不足を招く。 [] 何事もやりすぎはよくないのだ。

ア そして イ だから ウ つまり

問三 ①、②の文と同じ意味になる文をそれぞれア～ウから一つ選び、記号で答えなさい。

① A デパートは水曜日が祝日の場合、翌日の水曜日が閉店になる。

ア A デパートが木曜日に閉店していたら、前日の水曜日は祝日である。

イ A デパートは、水曜日が祝日でなかったら、翌日の水曜日は閉店しない。

ウ A デパートが木曜日に閉店していたら、前日の水曜日は祝日ではない。

② カモノハシとハリモグラ以外の哺乳類は、卵を産まない。

ア カモノハシとハリモグラ以外の生き物で、卵を産まなければ、哺乳類である。

イ カモノハシとハリモグラ以外の生き物で、卵を産めば、哺乳類ではない。

ウ 哺乳類でない生き物は、みな卵を産む。

三 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

主人公の岡野桜子は小学六年生。玲香、佳椰、萌奈美と仲良しだ。しかし、桜子は四年生のころにクラスで孤立してしまった経験から、友だちに嫌われてしまうことを恐れて本音を言うことができずにいる。

ある日、休日にホラー映画鑑賞に誘われた桜子。ホラー映画が苦手だと言いつつも、とうとう映画へ行く日がやってきた。

今日は、土曜日で学校はお休み。

わたしたちは、いつものグループ四人組で、映画館へやってきた。

この夏、最大のホラー映画『かくれんぼ』。

SNSで集まった高校生が、学校に閉じこめられて、呪いの幽霊から逃げまわるお話だ。幽霊につかまると、生きて帰ることはできない。

わたしたちは、座席のまん中あたりに横一列に並んですわった。

映画を見ているあいだ、みんなは前のスクリーンを見ているから、わたしがずっと目をつむっていることには気がつかないだろう。

それでも、おどろおどろしい音楽や、さっきのような気持ちの悪い音が聞こえてくる。頭の中に浮かぶ想像だけで、わたしは気を失いそうになっ

ていた。

早く終わって。早く、早く……！

映画が終わるまでの二時間、わたしは生きた ② がしなかった。

「あーっ、めちゃくちゃこわかったー」

「わたし、今日、ねむれないかもー」

口では「こわい」と言っているのに、みんな、なんでこんなに楽しそうなんだろう。

映画が終わり、わたしたちは、次の目的地へ向かっていた。

「桜子ちゃんは、どこがいちばんこわかった？」

萌奈美ちゃんが聞いてきた。

「えっと……」

みんなが、わたしの答えを待っている。

どうしよう。

まさか、ずっと目をつぶっていたから、内容はまったくわからないなんて、とてもじゃないけど、言えないし……。

「ぜんぶ……」

わたしが言うと、みんなが突然、しんとしずかになった。

うそ……わたし、③ まちがったことを言ってしまったの？

四年生のころの悪夢がよみがえり、汗が ④ とわいてきた。

「だよねーっ！」

沈黙を破るように萌奈美ちゃんが声をあげた。

ほかの子もそれに続く。

「わたしも、ぜんぶこわかった！」

「わかる、わかる。ずっと心臓ドキドキしてた」

……よかった。長く感じた沈黙でも、実際はほんの一瞬しゅんだったんだらう。

わたしは、ホッと胸をなで下ろした。

「ねえ、見て。すごく並んでるよ」

玲香れいかちゃんが指さしたのは、みんなで飲もうね、と約束していたフラッペジュースのキッチンカーだ。

フラッペジュースは、かき氷とフルーツジュースがドッキングした、いま、SNSでも大人気の飲み物だ。

ジュースの中には、星形や月形のゼリーが浮かんでいて、見た目のかわいさも人気の理由だった。

行列は三十メートルくらい続いている。いったい、何人並んでいるんだらう。

「人気あるとは聞いてたけど、ここまでとは思わなかったね。どうする？」

玲香ちゃんが言った。

本当のことをいうと、わたしは、並んでまで飲みたいとは思わなかった。

今日は暑いし、たしかにのどはかわいているけれど、フラッペジュースじゃなきゃいやってわけじゃないし……。

ああ、友だちって、いったいなんなんだろう。

「映画を見てつかれたから、べつの、すいているお店に行きたいな」っ

て、言っちゃだめなのかな。

——「ふつうのひとにならなくちゃ」

⑤ 心の中で、呪文じゅもんをと念える。

そうだ、ふつうのひとなら、ここで「べつのお店にしよう」なんて言わないんだ。

わたしが考えていたことの、答え合わせのように佳椰かやちゃんと萌奈美ちゃんがこう言った。

「ここまで来たら、並ぶに決まってるでしょ！」

フラッペジュースを手にするまで、わたしたちは暑い中、一時間半も並んだ。

「あーっ、おいしかった」

みんなは、そう言うけれど、すっかりつかれていたわたしには、味がよくわからなかった。

「ねえ、わたし、行きたいところがあるんだけど」

佳椰ちゃんが言って、今度は、アイドルグッズを売っているバラエティーショップに行くことになった。

そのお店は、駅前のショップビルビルの五階にある。

ビルに入り、エスカレーターで上に向かおうとしたときだった。

あつ。

壁かべに貼はってあるポスターに、わたしは一瞬で目をうばわれた。

『神秘の人形世界、特別展示中』

背中に羽をつけている妖精よまの人形がうつっているポスター。

⑥ トクン、トクンと鼓動こがはやくなっていく。

どうやら、このビルの七階で行われている展示のようだった。

ポスターの中にある青い目の妖精が、わたしに語りかけているように見えた。

——「わたしをみつめて。会いに来て」

……見てみたい。どんな人形か、勉強になるかもしれないし。

「ちっ」

突然、後ろから舌打ちが聞こえて、わたしはハッと我に返った。

「ご、ごめんなさい！」

わたしが足を止めていたせいで、後ろには同じくエスカレーターに乗りたいひとが何人もつまっていた。

あわててエスカレーターに乗る。

「やだ、もう、なにしてるの、桜子ちゃん」

「桜子ちゃんは、のんびりさんだからねー」

遅おくれてやってきたわたしを見て、みんなは、アハハと笑った。

おなかのまん中あたりが、ぬれたぞうきんをしぼるみたいに、

⑦ となる。

のんびりさんって笑われると、どうしても四年生のころ、教室でひとりぼっちになったことを思い出してしまう。あのときも、そうだった。

「桜子ちゃん、なにかあったの？」

萌奈美ちゃんが、わたしの顔をのぞきこむようにして、言った。

「う、うん……」

話してみようかな。

一瞬だけ、そんな思いが胸をよぎった。

——あのね、さっき、偶然ぐうポスターをみつけたの。このビルの七階で、人形の展示をやってるって。わたし、人形が好きで興味があるんだ。みんなも、よかつたらついでに見てみない？

心の中だけなら、言いたい言葉がすらすら出てくる。

それに、佳椰ちゃんは、みんなの前で堂々と言っていたんだ。「わたしはバラエティーショップに行きたい」って。

みんなの前で、自分の言いたいことを言うのは、なんもおかしなことじゃない。

だけど……。

みんなに、笑われたらどうしよう。

人形が好きだなんて、へんだって思われたら？

——「ふつうのひとにならなくちゃ」

耳みみの奥おくに、しっかりとしみついた呪文が ⑧ 回る。

「桜子ちゃん？」

萌奈美ちゃんに言われて、わたしは首を横にふった。

「ううん、なんでもないよ」

バラエティーショップに着くと、みんなは流行はやりのアイドルグッズを見て、きゃあきゃあ言っていた。

〔 中略 〕

月曜日になった。

朝の会が始まるまで、あと十分。

教室には、登校してくるクラスメートがぞくぞく増えてくる。

わたしはいつもの四人組でかたまっていた。

「映画、楽しかったねー」

「ねえ、夏休みもみんなでお出かけしようよ」

佳奈ちゃんが言っていて、みんなは「どこがいいかな」とあれこれ考えだす。

……わたしなら、市内の美術館へ行ってみたいな。

美術館では、毎年、夏休みになると、わたしたち子どもでもなじみやすい展示をしてくれる。今年は、人形劇のパペットたちを展示するそうだ。人形作りが趣味のわたしにとって、すごく勉強になりそう。

みんなと行くのも楽しいかも……。

無理かな。美術館なんて、まじめすぎるって言われちゃうかも。

うん、だまっていよう。

わたしは、また自分の意見をおし殺した。

「ねえ、ドリームランドのおばけ屋敷は？」

玲香ちゃんが言った。

ドリームランドは、わたしの住む地域に唯一ある遊園地だ。

「このまへの映画見て思ったんだ。やっぱり、ホラーの世界ってすごく楽しいなって」

「きゃー、さんせい、さんせい」

「あそこの遊園地、おばけが出るところが毎回ちがうっていううわさだもんね」

……え、うそ。

またホラー？

どうしよう……。

三人の会話を聞きながら、わたしは心臓がドキドキしてきた。

もう、いやになってきた。

こんなこと、考えちゃいけないのかもしれない。

友だちがいるだけで、わたしはめぐまれているのかもしれない。

でも、いつも自分をおし殺して過ごすのは、とても苦しい。

みんなに合わせてはばかり。

なんだか、自分がなくなっていくような……。

「きゃああつ！ さ、桜子ちゃん！」

玲香ちゃんが悲鳴をあげた。

え？

ふいに、自分の手を見て、わたしはびっくりした。

うそ！

わたしの手が、砂の像がくずれるみたいにして、指先からほろほろと

風化していつている。

わたし、どうなっちゃうの？

だれか、止めて！

助けて！

そう思っているうちにも、砂の流れはさらさらと止まらない。

わたしが、どんどんくずれていく。

とうとう、わたしはすべてが砂になり、人間としての姿をなくしてしまっただけだ。

教室のかたすみに、もとはわたしだった砂の山が、こんもりとできあがる。

ただ、わたし、としての意識はまだ残っていた。

玲香ちゃんたちが、わたしを見下ろして、笑っている。

「あーあ、こわれちゃった」

萌奈美ちゃんが言った。

「どうする？ 佳椰ちゃん」

「しかたないよ。また次の子、さがそう」

「そうだね」

そんな会話をして、みんなはどこかへ行ってしまった。

……ひどいよ。

わたしって、いてもいなくても、みんなにとっては、どうでもいい存在だったんだ。

あんなに自分をおし殺して、いつもみんなに合わせていたのに。

それどころか、わたしが消えかかっているときも、だれも助けようともしてくれなかった。

しばらく経って、わたしは玲香ちゃんたちではない、べつのだれかに

見下ろされているのに気がついた。

「あらあら、どうしましたか？」

この声、どこかで聞いたことがある。

砂になったわたしは、意識を集中させ、声の主をさがした。

黒いワンピースに、フリルのついた白いエプロン……。

わたしを見下ろしているのは、『純喫茶クライ』のマスターさんだった。

マスターさんはその場にひざをつくと、砂のわたしにふれた。

「こんなになっちゃって。かわいそうに」

手で、ぎゅつ、ぎゅつと砂をかため、マスターさんはなにかの形を作ろうとしている。

その形は、もとのわたしだった。

人間の、わたし。

足、胴体、腕、頭、わたしがだんだんとできあがっていく。

仕上げは、顔だ。

だけど、マスターさんは、わたしの顔を作っては、ため息をつく。

「うまくできませんね」

作ってはこわし、をくりかえすけれど、顔はなかなか完成しない。

「先生を呼ぶしかありませんね。先生、せんせい」

マスターさんが呼ぶと、どこからかひとりの女のひとがやってきた。

その女のひとは、わたしの顔をてきぱきと修復していく。

女のひとと、わたしの目が合ったとき……。

ドキン、と心臓がふるえた。

このひと……。

もしかして、わたし？

年は、ぜんぜんちがう。

おとなの女のひとだけど、そのひとは、わたしによく似ていた。

ああ、わかった。

おとなになった、わたしだ。

わたしは、わたしに、やさしく語りかける。

「まわりに、無理に合わせなくてもいいんだよ。自分の好きな世界を、自信を持ってたいせつにして。そうして生きていけば、だいじょうぶ。勇気を出して。自分は、自分でいて。あなたなら、できる」

本当なの？

わたし「ふつうのひとにならなくちゃ」って思わなくても、いいの？

⑨ なみだ
涙が出てきた。

砂でできているわたしは、涙を流すたびに、また顔がくずれてしまう。

それでも、目の前にいるおとなのわたしは、やさしくほほえんでくれる。
ている。

「好きなだけ泣いていいよ。何度でも直してあげる。だって、あなたは、たいせつなわたしだから」

そばで一部始終を見守っていた純喫茶クライのマスターさんが、ぱちと拍手はちをした。

「さすが、大人気人形作家の岡本桜子かみざさん。神業かみやをそばで拝見できて、

光栄です」

マスターさんが言った、人形作家って……。

えっ、わたし？

「桜子さんの作る砂人形は、展示会のたびに作ってはこわしていくというスタイルなんですよ。はかないからこそ、いまをたいせつに生きようというメッセージがこめられて、見るひとに勇気あを与えているそうですね」

マスターさんの言葉に、おとなのわたしが「ええ」とうなずいている。
「子どものころは、フェルトやハギレで布の人形を作っていたのですが、もっと自分に合う材料があるんじゃないかと試行錯誤さくごした結果、砂で作るようになったんです」

おとなのわたしは、そう言った。

おとなになったわたしは、人形作家になっているの？

夢が、かなっているんだ。

でも、そうするためには、いま、子どものわたしはどうしたらいいのだろう。

いまのわたしにできること。

——「自分の好きな世界を、自信を持ってたいせつにして」

おとなのわたしと言った言葉を思い出す。

そうだ、自分の好きな世界に自信を持つこと。

好きなものは、好きと堂々としていること。

それが、夢に近づくため、いまのわたしにできることなんだ。

いつのまにか、涙⑩は止まっていた。

「ああ、つかれた」

おとなになったわたしは「ん〜っ」と、のびをした。

「マスターさんのお店で、クリームソーダを飲みたいな。あ、おなかもすいちゃった」

「では、グラタントーストはいかがですか？ 厚切りの食パンに、あつあつのグラタンを入れて、こんがり焼くんです。チーズもたくさん載せましょう」

「わあ、おいしそう！」

ふたりは、わたしのもとから去っていった。

「……ちゃん、桜子ちゃん！」

肩をたたかれ、わたしはハッと我に返った。

あわてて自分の両手を見る。

だいじょうぶ、砂になんかなっていない。わたしは、ちゃんと、ここにいる。

「どうしたの？ ずっとぼんやりしていたよ」

玲香ちゃんが、心配そうにわたしの顔をのぞきこんだ。

「だいじょうぶ？」

「今日も暑いからね。もしかして、熱中症しんじょうじゃない？」

「そういえば桜子ちゃん、映画に行った日もぼんやりしてたもんね。あのときも暑かったし。ねえ、保健室に行こうか」

佳椰ちゃんも、萌奈美ちゃんも、わたしを心配してくれている。

三人とも、やさしいんだ……。

こんなやさしい友だちの前で、わたしは自分をおし殺して、言いたいことも言えずにいる。

それって、なんだかへんだよね。

さっきあったことは、夢だったのかな。

ううん、夢じゃないって信じたい。

おとなになったわたしは、夢をかなえている。

それを思い出すと、いままでまどっていたよるいをぬげるような、そんな気がしてきた。

自分の好きなことにも、自信を持つてみよう。

たとえ、それがまわりと少しちがっていても。

⑪ が、わたしを作るものになるんだって、おとなになったわたしを見て、わかったから。

これからは、なんでもかんでも、みんなに合わせるのはやめよう。

「みんな、わたしはだいじょうぶだよ。心配かけてごめんね」

わたしは言った。

よし、このまま、わたしの好きなこともみんなに話してみよう。

「ねえ、夏休みのお出かけのことなんだけど、わたし、美術館に行きたいんだ」

心臓がドキドキする。

どんな反応が返ってくるんだろう。

「美術館？」

「えー、意外だね」

みんなが「へえ」という顔でわたしを見る。

だいじょうぶ、この調子、この調子。

わたしなら、できる。

「あのね、美術館って夏休みには子ども向けの展示をやっていて、いつも楽しいんだよ。去年は絵本の原画で、今年は、人形劇のパペットを展示するの」

わたしが言うと、玲香ちゃんが「パペットってなに？」と聞いてきた。

「劇で使うお人形のことだよ」

「わあ！ おもしろそうだね」

「美術館も、いいかも！」

みんな、興味を持ってくれたみたいで、その顔がぱあつと明るくなった。

心の中で、おとなになったわたしがほほえむ。

お守りを手にしたみたいに、心強い気持ちになった。

『地図にないお店 純喫茶クライ』 吉田桃子（岩崎書店）

※『純喫茶クライ』のマスターさん…『純喫茶クライ』は、地図にのっていない、だれの目にも見えない場所にある不思議な喫茶店。子どももの傷ついた気持ちをキャッチした時だけ、看板に明かりをともし、その子をまねき入れる。桜子は、一度来店した経験がある。マスターさんは、若い女性で、この店の主人である。

問一 —— ①とは、どのような意味ですか。最もよいものを次より選

び、記号で答えなさい。

ア 重々しくゆううつなこと。

イ 雑でいい加減なこと。

ウ はかなくて繊細せんさいなこと。

エ 不気味で恐ろしいこと。

オ 激しくて乱暴なこと。

問二 ②に当てはまる表現として、最もよいものを次より選

記号で答えなさい。

ア 気持ち イ 実感 ウ 感触しんじく

エ 気分 オ 心地

問三 —— ③とありますが、どういうことですか。最もよいものを次

より選

ア みんなの求める答えと違う、場を白けさせてしまうこと。

イ 自分の本音ではない、その場しのぎでいい加減なこと。

ウ 萌奈美ちゃんを怒らせてしまうような、無神経なこと。

エ 映画を楽しめなかったという、正直な意見のこと。

オ 本当は見えていなかったのに、見ていたとうそをついたこと。

問四 ④、⑦、⑧に当てはまる言葉を次よりそれぞれ

れ選び、記号で答えなさい。ただし、同じ記号は一度しか使えませ
ん。

ア きゅうつ イ くらくら ウ ずるずる

エ ぐるぐる オ どきつ カ きゅん

キ どかん ク しっとり ケ どつ

問五 ⑤とありますが、桜子が「呪文をとなえ」たのはなぜですか。

最もよいものを次より選び、記号で答えなさい。

ア 仲良くしてくれている友達への感謝の気持ちを思い出すため。

イ 本音を言いたくなつてしまった気持ちを打ち消すため。

ウ 友達に対するこれまでの怒りが爆発しそうになつたため。

エ 冷静にみんなの様子を見てからどうしたらよいかを決めるため。

オ フラッペジュースを飲むという当初の目的を思い出すため。

問六 ⑥とありますが、この時の桜子はどのような気持ちですか。

自分の言葉で説明しなさい。

問七 ⑨「涙が出てきた」、⑩「涙は止まっていた」とあり

ますが、この間の桜子の心情を、次のようにまとめました。

I Ⅲに言葉を補って説明しなさい。I は本文

中より指定字数でぬき出し、II、Ⅲは自分で考えて答

えなさい。

もう、「I (十三字)」と自分に言い聞かせなく

ていいのだと分かつて II し、その後「おとなのわたし」との会

話を通じて III と考えられるようになった。

問八 ⑪に当てはまる言葉として、最もよいものを選び、記号で

答えなさい。

ア 周りのお友だちの応援

イ あきらめないねばり強さ

ウ みんなとちがう部分

エ みんなにほめられる特技

オ 夢を叶えたい気持ち

問九 本文を読んだ生徒たちが感想を話し合っています。内容を読み取
れている人を一人選び、A～Eの記号で答えなさい。

生徒A：私は主人公の桜子ちゃんに共感したよ。特に、お友達からどう
思われるか心配で、お化け屋敷に行きたくないって言い出せな
くて悩むシーンは、小学生のころの自分と重ね合わせちゃっ
た。

生徒B：たしかに、誰でも桜子ちゃんみたいな悩みを持つ時期ってある
よね。はっきり意見を言えるキャラクターに見える佳椰ちゃん
も、悩みもあるだろうし、桜子ちゃんみたいな時期もあったん
じゃないかな。

生徒C：桜子ちゃんが砂になっちゃったシーンは驚いたな。玲香ちゃん
たちが「また次の子、さがそう」と言ったのは、桜子ちゃんに
自信をつけてほしくて、あえて冷たい態度をとったんだろうと
感じたよ。

生徒D：私は最後に勇気を出して「美術館に行きたい」と言ったシーン
に感動したよ。ささいな出来事だけど、今まで気をつかってば
かりだった桜子ちゃんにとっては、かなり大きな一歩だったん
じゃないかな。

生徒E：「ふつうのひとにならなくちゃ」って思い込んでいた桜子ちゃ
んが、お友達はあるのままの自分を認めてくれていて、桜子ちゃん
いたんだよね。お友達を信頼できるようになって、桜子ちゃん
の成長を感じたよ。

四 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

次に、柳※やなぎが考えた「民藝※げい」とは何か、そして柳が民藝にどのような
たらきを見出していたのかを確かめてみたいと思います。まず、読み解
いてみたいのは、柳による民藝運動の「マニフェスト」ともいえる『工藝
道』にある一節です。

② されば地※へたと隔※わる器※うつわはなく、人を離※はなるる器※うつわはない。それも吾々※われわれ
に役立※やくだとうとしてこの世※よに生※うまれた品々※うまである。それ故※ゆえ用途※もちを離※はなれては、
器※うつわの生命※いのちは失※うせる。また用※もちに堪※たえ得※えずば、その意味※いみはないであろ
う。そこには忠順※ちゆうじゆんな現世※げんせいへの奉仕※ほうしがある。奉仕※ほうしの心なき器※うつわは、器※うつわ
と呼※よぶるべきではない。用途※もちなき世界※せかいに、工藝※こうぎの世界※せかいはない。

（『工藝の道』）

工藝の美は、奉仕の美である、すべての美しさは奉仕の心から生まれ
る、と語ります。柳にとって奉仕とは、原義のとおり人間というよりも
神仏に仕えることにほかなりません。工藝に奉仕の心がある、と柳がい
うとき、器はまず人に対する以前に、超越※ちゆうえつ的存在※そんざいに対して、わが身を
奉じ、仕えている、という認識※にんしきがある。また、真に奉仕するものは、見
返りを求めない、ということも含意※ごんぎされている。

「奉仕の心」という言葉も、一見すると、この「心」は、工藝職人の心
であるかのように思われ、作る人の心が清らかであれば、清らかな美し

いものが生まれる、という風にも読める。しかし、柳はそのように短絡的には考えていません。

ここで柳がいう「心」とは、人間の心である以上に「物」の心なので。それは、すべての「物」には心がある、というアニミズムとは異なります。柳は「器」は、生物とは異なるありようではあっても、「いのち」あるものだと考えている。「いのち」が宿るとき、そこに奉仕の心もまた宿る。それは彼の思索の結果ではなく、打ち消しがたい経験なのです。

③ 宮沢賢治の作品を読むと、同質のことが描き出されているのに出会います。賢治が鉱物に「いのち」を感じていたのは明らかです。「銀河鉄道の夜」には次のような印象的な一節があります。「この砂はみんな水晶だ。中で小さな火が燃えている」。賢治も砂に「いのち」を感じています。同様のことは器と柳のあいだにも起こっているのです。

④ 「物」が「奉仕」する。ここにはおのずと「忘己利他」が実現する。民藝の器には主張すべき「我」がないからです。そして、どのように用いられるかを、自分以外の存在、すなわち人にゆだねているからでもある。

器による奉仕は、人に用いられることによって実現する。先に引いた『工藝の道』の言葉に「用に堪え得ずば、その意味はない」という一節がありました。

用とは「用いられる」、つまり「用い得る」ということです。「物」は、

見られるだけでなく、用いられ、生活のなかに浸透していくことで、真に「いのち」を帯びたものになる。「民藝」は生まれたときに「民藝」となるのではなく、用いられることによって「民藝」になっていくのです。

そうした「民藝」になり得る物を柳は「工藝」と呼びます。そのいっぽうで、飾られ、眺められるだけのものを「美藝」と呼びました。柳は「美藝」を否定しません。しかし、工藝の優位を説くことも躊躇しませんでした。

一九三六年、柳宗悦は民藝運動の本拠として日本民藝館を創設します。日本民藝館にある民藝と、上野の東京国立博物館に展示されている民藝とを見比べると、その姿に決定的に違うところにすぐ気がつくと思います。

東京国立博物館には、誰も触っていない、造られたままのものが展示されています。博物館の収蔵品ですから、誰かが使うことはありません。

一方、柳の手にあつた民藝は、用いられたあとが歴然としています。事実、彼が生きている間、普通に食卓などで使っていたものもあります。そこに顕われている美の差異は、一目瞭然です。日本民藝館には、一部が欠けたものも飾られています。民藝の場合は、古くなればなるほど、修繕すればするほどその固有性を強くする。さらにいえば、欠けたままでも美しい。

あるところで柳は、わざと古く見せようとしてつけた疵ほど醜いもの

はないと語っています。作られた疵は単なる破壊ですが、その一方で人々が用いることで付いた疵からは、新しい美が生まれることもある。

書物にも似たことがいえます。「本」と「書物」という言葉を使い分けて、本は書店に置かれているもの、書物は誰かに読まれたもの、と言いついで換えるとしたら、民藝は、じつに「書物的」です。本は読まれることで書物になる。さらに同じことは料理にもいえます。それは人に食されたとき、真の意味での「糧」になる。出来上がったときがもつとも美しいなどということは全くない。用いられ、時のちからを得て、変貌し、美が深まっていくというのが民藝をめぐる柳の実感だったのです。

『工藝の道』には、次のような美しい文章もあります。

「身は精霊の宮」と記されている。地をこそ天なる神の住家といひ得ないであろうか。冬枯れのこの世も、春の色に飾られる場所である。

〔 中略 〕

美が厚くこの世に交わるもの、それが工藝の姿ではないか。味なき日々の生活も、その美しさに彩られるのである。現実のこの世が、離れじとする工藝の住家である。それは貴賤の別なく、貧富の差なく、すべての衆生の伴侶である。これに守られずば日々を送ることができぬ。晨も夕べも品々に囲まれて暮れる。それは私たちの心を柔らげようとの贈物ではないか。見られよ、私たちのため

に形を整え、姿を飾り、模様以身を彩るではないか。私たちの間に伍して悩む時も荒む時も、生活を頌とうとて交わるのである。それは現世の園生に咲く神から贈られた草花である。(同前)

民藝は語ることなき「衆生の伴侶」であり、人の苦しみや痛みを「柔らげようとの」天から贈られた物である、それはいわば、現実世界という「園生に咲く神から贈られた草花である」というのです。工藝は、超越の命によって人間界に遣わされたものである、と柳は感じている。

柳の本性をひと言でいうとしたら、詩人哲学者といふべきなのかも知れません。詩人は語り得ない言葉を聞き、哲学者はそれを他と分かち合うために、言葉の可能性を極限まで探って、あえて言葉によって表現しようとするのです。

この本のほかの場所で柳は、「民衆の伴侶」という印象的な表現も用いています。民藝というのは、単に土でこねられた物体ではなく、私たちの生ける伴侶である。そして、私たちが、もつとも過酷な生涯を生きるときに寄り添い、何か働きかけるものなのだ、というのです。

こうした話は、物や言葉に限りません。人はさまざまなものに慰藉を感じています。ある人は音や旋律に、あるいは色や香り、造形や沈黙にそれを感じる人もいます。

⑦ 同質のことは人と人のあいだにもいえるのかもしれない。私たちのなかにあるものは、他者の心にはたらきかけ、そして受け止められたとき、それまでに見えなかった「いのち」を開花させるのかもしれない

のです。

利他は「他」と「自」がおのずと一つになっていなければ起こり得ない、という基本的かつ肉感的な認識が柳にはありました。そしてまた、利他の本質は、人間の主体性の産物ではなく、非・人間的実在との呼応において現象するとも考えていました。

利他とは個人が主体的に起こそうとして生起するものではない。それが他者によって用いられたときに現出する。利他とは、自他[※]のあわいに起こる「出来事」だともいえます。

ここでの「出来事」というのは、人が作意によって起こすことができな現象のことです。そこには人為^いとは別なはたらきが必要になる。ときにそれは、距離^{きょり}であり、時間であり、そして忘己の精神である。さらにはマザー・テレサのような人であれば、躊躇^{ちゅうちゆ}せずに、神の助けこそが不可欠であるというでしょう。

「美と奉仕と利他」若松英輔

『利他』とは何か』伊藤亜紗 編（集英社新書）

※柳…柳宗悦のこと。日本の思想家、美術評論家。（1889～1961）

※民藝…「民衆的工藝」の略で、日々のくらしの中から手仕事によって生まれた日用品のこと。柳らは、民藝の美しさとその価値を世に広めようと「民藝運動」を行った。なお「藝」は「芸」の古い字体。

※隔る…二つの間に差があり、離れている。

※用に堪え得ずば…使う人の用途に対応できなければ。

※含意…言葉が表面には現れない別の意味をふくみ持つこと。

※アニミズム…自然界のあらゆるものにたましいが宿るといって考

方。

※忘己利他…「己^{おのれ}を忘れて他につくす」という意味の仏教用語。

※躊躇…ためらうこと。

※貴賤…身分の高い人と低い人。

※衆生…生きとし生けるもの。

※伴侶…仲間、ともに連れ立っていく者。

※晨…夜明け、朝のこと。

※伍する…仲間としていっしょにいる。

※頒つ…分かち合う、共有する。

※慰藉…なぐさめやいたわり。

※あわい…あいだ。

※人為…人間の力で行うこと。

※マザー・テレサ…カトリック教会の修道女として、貧困や病に苦しむ人を救う人道支援活動を行い、ノーベル平和賞を受賞。（1910～1997）

問一 —— ①の意味を次より選び、記号で答えなさい。

- ア これまでの活動を記録したもの
- イ 複数の意見をまとめたもの
- ウ 守るべき規則を並べたもの
- エ 方針や考えを世の中に示したもの
- オ 材料や作り方が書かれたもの

問二 —— ②とありますが、どういう意味ですか。最もよいものを次より選び、記号で答えなさい。

- ア 器はその土地に生きる人の生活に合わせて、自分たちで作るべきだということ。
- イ 器は人間の生活の中で使われ役に立つことで、初めて生命が宿るということ。
- ウ 器は土や木などを素材とし、人間の手で作られるから生命が宿るということ。
- エ 器は生活を支える大切な道具であるから、決して手離してはいけないうこと。
- オ 器はその家の家宝として、代々大切に受けつがれていくものであるということ。

問三 —— ③について、「銀河鉄道の夜」以外の宮沢賢治の作品として

当てはまらないものを次より一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 風の又三郎
- イ 小僧の神様
- ウ 注文の多い料理店
- エ セロ弾きのゴーシュ
- オ 雨ニモマケズ

問四 —— ④とありますが、どういうことですか。最もよいものを次より選び、記号で答えなさい。

- ア どんな使い方をされてもいいように、様々な機能をつけること。
- イ 工藝職人の心の清らかさが、物を通じて使い手に伝わること。
- ウ 心をこめていいねいに作られた物が、使う人の心をいやすこと。
- エ 誰もが使いやすいように、その物の最適な使い方を示すこと。
- オ 用途に合わせた使い方を実現することで、人の役に立つこと。

問五 次の1～4は、||| ア「工藝」、イ「美藝」のどちらに当てはまりますか。それぞれ記号で答えなさい。

- 1 東京国立博物館に展示されているもの
- 2 「書物」と似ているもの
- 3 疵を修繕することで味が出てくるもの
- 4 飾られ眺められるだけのもの

問六 —— ⑤とありますが、筆者がこのように考えるのはなぜですか。その理由を説明した次の文の に当てはまる言葉を、本文中より十三字でぬき出しなさい。

長く用いられることでその物が になると
考えているから。

問七 —— ⑥は「民藝」のどのような点を表現していますか。十五字程度で答えなさい。

問八 —— ⑦の「人と人のあいだ」に起こりうる「同質のこと」とはどのようなことですか。最もよいものを次より選び、記号で答えなさい。

- ア 音楽や色、香りなどが人と人の仲を取りもち、人々の心をなぐさめるということ。
- イ ある人の何気ない行いや思いを他の人が受け止め、心がなぐさめられるということ。
- ウ 他者と助け合いなくさめ合うことで、人はいきいきと生きていくということ。
- エ 人のどのような思いや行いが自分をなぐさめるかは、人によってちがうということ。
- オ 人の心をなぐさめるのに、形あるものや明確な言葉は不要であるということ。

問九 柳宗悦の考える「利他」とはどのようなものですか。最もよいものを次より選び、記号で答えなさい。

- ア 自分がやっているということを、他者に気づかれずに行うもの。
- イ 他者の求めの有無に関わらず、自分がやろうと決めてやるもの。
- ウ 人が起こそうと思ってもできない、非現実的な力によるもの。
- エ 他者との関わりがなくても、自分の中に自然と生まれるもの。
- オ 自分の意志ではなく、他者との関わりの中で自然に起こるもの。

